

『華夷訳語』の音訳法の諸問題

——『女真館訳語』を中心に——

更 科 慎 一

1. 『華夷訳語』の乙種本と丙種本

明の朝廷で編纂され清代にも引き継がれた語学学習書『華夷訳語』には甲、乙、丙の三種の系統がある。主な内容は、意味カテゴリ（門類）によって分類された漢語と学習対象言語の対訳語彙（通常「雑字」と呼ばれる）である。乙種本は外交文書の翻訳を司る四夷館において、丙種本は外交使節の接待と通訳を司る会同館において、それぞれ編纂されたとされる¹。周知のように、乙種本は、異言語を表記するのに、音訳漢字に加え、その言語において用いられる固有文字（本稿では以下「民族文字」と称する）を併記するのが特徴であり、一方丙種本は音訳漢字のみを用い民族文字は用いない。本稿で考察の対象とするのは、乙種本と丙種本の「雑字」の音訳漢字の部分である。なお、（甲種本と）乙種本には、雑字のほか「来文」と呼ばれる文例集が付属しているが、本稿では来文は考察対象に含めない。

『華夷訳語』が取り扱う諸言語（その言語を管轄する部門の意味で「××館」と呼ばれる）のうちのいくつかは乙、丙のいずれかしかなく、他のいくつかは乙、丙の二種がある。周知の事ではあるが、議論の便のため、乙・丙の種別と言語種との関係を下の表に示す。表の「○」は、乙/丙種本におけるその言語版の存在を表す。

館名	言語名	乙種本	丙種本	備考
韃靼	Mongolian(モンゴル語)	○	○	
女真	Jurchen(女真語)	○	○	女真は女直ともする
西番	Tibetan(チベット語)	○	○	
西天	Sanskrit(サンスクリット)	○		
回回	Persian(ペルシャ語)	○	○	
百夷	Pai-i(百夷語)	○	○	タイ諸語、文字はタイ・ナ文字に近縁
高昌	Uyghur(ウイグル語)	○	○	丙種本では「畏兀兒」
緬甸	Burmese(ビルマ語)	○		
八百	Pa-pai(八百語)	○		タイ諸語、文字はラオ文字に近縁
暹羅	Thai(タイ語)	○	○	

¹ 石田（1930）参照。なお甲種本は洪武二十二年（1389）の劉三吾の序があり、学習対象言語はモンゴル語である。

館名	言語名	乙種本	丙種本	備考
朝鮮	Korean(朝鮮語)		○	
日本	Japanese(日本語)		○	
琉球	Ryukyuan(琉球語)		○	
安南	Vietnamese(ベトナム語)		○	
占城	Cham(チャム語)		○	
満刺加	Malay(マレー語)		○	

2. 音訳漢字に現れた乙種本と丙種本の差異

2. 1. 記述対象たる言語の差異

乙、丙の双方の種があるモンゴル語、女真語、チベット語、ペルシャ語、百夷語、ウイグル語、タイ語の『華夷訳語』に関しては、乙種本と丙種本それぞれが記載する言語に差異があるかどうか、あるとすればその差異が何に由来するものであるのかが問題となる。先行研究において、乙種本と丙種本の記述言語の差異については、①時代的差異、②方言的差異、③文体的差異の三つの点から議論されることが一般的である。

①の時代的差異については、『華夷訳語』の乙種・丙種とも、序跋など成立に関する具体年代を明確に記した内容を欠くため、多くの場合、「編纂年代不詳」とせざるを得ず、このことはこの資料の言語学的価値を限定的なものとしている。但し、史書に見える各館の設置沿革に関する記載、校勘記に記された日付、雑字部分に収録された語彙（特に、地名・官名・物品名など）や来文に出現する年号などから、諸本の成立の上限・下限を類推し得る。また、『訳語』の言語的特徴を他の時代の資料と比べることにより、記述対象言語の相対的年代を考究することができる。乙種本と丙種本の両方がある言語種の『華夷訳語』の既存研究においては、丙種本の反映する言語が乙種本のそれよりも年代的に後であるとするものが多い。例えば愛新覚羅（1996）は、『女真館訳語』について、乙種本の編纂が丙種本に先行するという前提に立って、丙種本の女真語の言語的（主として音韻面における）特徴を検討している。西田（1970）は、『西番館訳語』について、乙種本のチベット語を十五世紀のものとする一方、丙種本のチベット語については「十六世紀中頃のチベット語口語の形式をかなりよく伝えて」(22頁。なおこの文言は既に西田（1963:94）に見えている）いるとする。庄垣内（1982）は、『畏兀兒館訳語』の言語について、音韻形態上、乙種本の言語よりは発達した特徴を示すとしている（庄垣内（1982:25））。

②の方言的差異については、全体に、同時代資料の不足や音訳漢字による表音とい

う特質、また語彙形式の真実性の問題などの原因から、『華夷訳語』に記載された諸言語の所拠方言を言語学的手法のみによって推定するのは困難である場合が多く、収録された地名などから類推する必要がある²。西田（1963）は、乙種本『西番館訳語』のチベット語について、アムド地方の一種の共通語であるとする一方、丙種本については、その「地名門」の第三項に「天全六番招討司」が見えることなどを根拠に、西康省天全周辺のチベット語方言であるとした。

③の文体的差異は、乙種本と丙種本の編纂目的の相違から当然想定されることであり、端的に言うならば、乙種本は書面言語（文語）を記載し、丙種本は口頭言語（口語）を記載していると想定される。特に乙種本は、学習対象言語において使用される文字を記載するのを常とするから、基本的に、記録された語彙は文字表記が可能なもの、つまり書面語の語彙であると当然考えられる。西田（1960）（百夷語）、西田（1963, 1970）（チベット語）、庄垣内（1982）（ウイグル語）、愛新覚羅（1996）（女真語）などの先行研究はみな、乙種本が文語を、丙種本が口語をそれぞれ記述したものであることを述べている。

2. 2. 音訳手法上の差異

一部の乙種本と丙種本の間には、前節で触れた表記対象言語の側の差異に加えて、音訳手法の差異も存在するように筆者には思えるが、この問題が論じられることは従来あまりなかった。

乙種本は、一つの語句に対して、音訳漢字と民族文字の両様の表記がなされているため、言語史の資料として乙種本を扱う場合には、両表記がいかなる関係にあるのかが問題となる。中でも、乙種本の編纂者たちが、各項の見出し漢語の対訳語をまず民族文字表記によって記録し、その後民族文字表記をもとに漢字音写作業を進めていったのか、それともその逆に、対訳語をまず音訳漢字によって記録し、後から民族文字表記をつけていったのか、という問題がある。前者の可能性が濃厚な乙種本には例えば『女真館訳語』がある。Kiyose（1977：38）は、乙種本『女真館訳語』の音訳漢字が、一つ一つの女真文字に対してつけられていると指摘している。実際、女真館訳語では、漢語借用語などの一部の例外を除き、一つの女真文字がほぼ一定の音訳漢字と対応している。例えば“麻”と“馬”のように、声調を除き同音で、女真語の同じ音連続を表したと考えられる音訳漢字について、対応する女真文字を調べてみると、漢字の使い分けが女真文字と対応することが確かめられる：

² また乙種本の場合、すぐ後（③）で述べるように、文語を反映すると見られる場合が多く、そもそも特定の一地方の方言によっていると言にくい。

音訳に“麻”が用いられた女真文字:219 (麻 ma)³, 541 (麻 ma), 574 (麻 ma), 245 (麻希 mahi)

音訳に“馬”が用いられた女真文字:383 (馬 ma), 620 (法馬 fama)

このようなことは、まず女真語語句の音声を漢字音訳し、後から女真文字表記を求め、という編纂方式では起こりにくい。乙種本女真館訳語の音訳作業は、女真文字と音訳漢字の対応表のようなものを手許に備えた上で行われたと考えるべきであろう。

一方、音訳漢字が先にあつて文字表記は後からつけられた、ということは、前者から後者を導き出すことの困難があるため、一般に考えにくいけれども、不可能ではない。モンゴル語を表記した乙種本『韃靼館訳語』の雑字部分は、その内容において、先行する甲種本の雑字をほぼ継承しているが、乙種本に附せられているウイグル式モンゴル文字は甲種本にはなかったものであり、音訳漢字が先にあつて民族文字表記は後からつけられたものであることがはっきりしている(乙種本の音訳漢字は、甲種本の音訳漢字に附されていた小字や区別符号を削除するなど、改編が加えられているが、それを除くとほぼ同じであり、甲種本を土台にしていることは明瞭である)。また、西田(1960:11)は、乙種本『百夷館訳語』において、「漢字表記、すなわち漢語の音韻論的基盤にたつて知覚し記述されたタイ語にもとづいて、百夷文字を用いたと考えられる場合が少なくない。したがって、これらの末尾子音【本来末尾子音が期待されない語において出現する-kなどの子音—引用者注】が百夷綴字面にあらわれているのは、表記漢字から類推的に使用された誤用によるものと解釈できる」との考えを示し、音節末子音-kがもともと期待される語「雲」mwakに対して音訳漢字“莫”⁴が当てられたために、同じく“莫”をもって音訳されるが百夷語としては-kが期待されない「手」「時」「廻る」等の語に対しても、「雲」から類推してmwakという百夷語綴りを書いたと考えられる例などを挙げている。西田氏のこの指摘に従うならば、乙種本『百夷館訳語』の編纂に当たっては、音訳漢字が先にあつて百夷文字が後からつけられたとまでは言えなくとも、少なくとも一部の語については、百夷文字が音訳漢字表記の影響を受けた形で綴られたことになる。

2. 3. 転写的音訳と聴覚的音訳

本稿の主要な関心は、漢字音訳が転写的であるか、それとも聴覚的であるかの差異が、『華夷訳語』の音訳漢字の字面に与える影響、というところにある。ここで、仮

³ 番号はKiyose(1977)において各女真文字に附された番号。ローマ字はKiyose(1977)の再構音。

⁴ 本稿では、地の文の中で資料中の漢字を引用する時、音訳漢字であれば“ ”に括り、意味を表す漢字(特に、『華夷訳語』の見出し漢語)であれば「 」に括って示すことにする。

に転写的というのは、外国語音を表記する際に、その外国語の正書法の文字綴りに基づくことであり、また仮に聴覚的というのは、外国語音を耳に聞こえた通りに記すことである⁵。日本語における外来語の片仮名表記を例に説明すると、転写的な表音には次のような例を挙げる：

(1-1) condition[kən'diʃən] コンディション

(1-2) American[ə'merikən] アメリカン

(2-1) baked[beikt] ベイクド

(2-2) collect[kə'lekt] コレクト

上の (1-1) と (1-2) の場合、英語の [kən] という (概略的に) 同じ音を、(1-1) では「コン」、(1-2) では「カン」と別様の仮名で写し、また (2-1) と (2-2) の対では、英語の [kt] という (概略的に) 同じ音を、(2-1) で「クド」、(2-2) では「クト」とやはり区別して表記している。英語の原音を耳に聞こえた通りに片仮名化しても決してこのような書き分けは起こらない。この場合、片仮名の側での書き分けの根拠は、聴覚印象ではなく、英語の綴り字あるいは形態音韻論的考慮であると考えられるから、これは転写的である。

一方、聴覚的な表音は、英語の water をアメリカ人が発音すると「ワラ」に聞こえる、という場合の「ワラ」などがそれである。聴覚的表音は、原音に忠実であるというよりは、原音の聴覚印象が、その言語の綴り字や形態音韻論的考慮に影響されることなく、音写者の母語の音韻体系に則った音形に直接変換されたものであり、ある意味ナイーブな音写であると言えよう。以上は英語を日本語に音写する場合の例であるが、逆の例、即ち日本語が英語に借入される場合も挙げるができる。「少し」という日本語音をもし sukoshi とローマナイズするならば転写的であるが、一方で英語の辞書の中にはこの語に由来する skosh[skouʃ] なる語を収録しているものがあり、音写がより聴覚的になっている。

現代中国語の外来音の漢字音写の状況はどうか。本稿執筆当時のアメリカ合衆国大統領 Trump 氏について、中国語圏では“特朗普” Tèlǎngpǔ[t'ɿ⁵¹ laŋ^{214/35} p'u²¹⁴] のほか“川普” Chuānpǔ[tʂ'uan⁵⁵ p'u²¹⁴] という訳名が行われている。前者は t や r の単音的性質

⁵ 本稿の転写的音訳と聴覚的音訳の別は、斎藤 (2003: 42-44) において議論されている字写 (transliteration) と音写 (transcription) の別に近いが、異なる点もある。斎藤 (2003) の言う字写とは「1文字1文字を機械的に別の体系の文字に置き換える」方式の文字体系の置き換えであり、一方音写とは「意味の単位ごとに」行われる文字体系の置き換えである。斎藤 (2003) は、字写と音写の違いを「原語の綴りを示す」:「その単語を表す」という目的の違いとして捉えているが、本稿の転写的音訳と聴覚的音訳の場合、ある言語の音を別の言語の文字体系に置き換えるのに、表記対象言語で用いられる文字からの情報により多く頼るか、それとも聴覚的感覚により多く頼るか、という違いを念頭に置いている。

を意識し、特に t を独立した漢字“特”に音訳する点で一定程度転写的と言えるのに対し、後者は tr- の部分が分析されずに反り舌音 ch[tʂ] に置き換えられ、一方英語の音韻論では重要でない -r- の円唇性が u 介音として受け止められるなど、多分に聴覚的な音写になっている。

『華夷訳語』の音訳漢字が転写的であるか、聴覚的であるかは、乙種本と丙種本のそれぞれの語種によって事情が異なっていたであろうから、最終的には音訳漢字の実際のありようを詳細に検討して結論を出すべきであるが、常識的に考えて、乙種本の音訳に際して民族文字が全く参考にされなかったことは考えられないから、乙種本の音訳は多かれ少なかれ転写的な傾向を帯びるのではないかと予測される。一方丙種本の場合、音訳の根拠は民族文字ではなく学習対象言語の音声形式そのものであり、従って、より聴覚的な音訳がなされたのではないかと期待される。

既に述べたように、『華夷訳語』に対する従来の研究では、乙種本と丙種本の音訳漢字の差異は、そのまま両者が表記している言語の差異であると受け止められている。しかし、英語の同じ [tramp] という音が“特朗普”とも“川普”とも音訳される中国語の現状を明代に及ぼして考えてみれば、乙種本と丙種本の音訳漢字の違いを直ちに音訳対象言語の音韻形式上の差異と見做すのではなく、音訳の手法（転写的/聴覚的）の違いである可能性も考えてみるべきであろう。本稿では、乙種本と丙種本がともに存在する語種のうち『女真館訳語』を取り上げ、音訳漢字の比較を行い、乙種本と丙種本の間を観察される差異を音訳の手法の差異としてどこまで説明できるかを試みたい。むろん、両者の差異がすべて漢字音訳手法の違いに帰すべきで、基づく女真語そのものには差異が全くない、と主張する意図はない。両本の女真語そのものに言語的差異が存することは、諸先行研究でも論じられてきたところであり、また本稿の考察の過程でも明らかになるであろう。

3. 『女真館訳語』の乙種本と丙種本の音訳漢字の比較

『女真館訳語』の乙種本と丙種本の語彙の比較には多くの先行研究が存在する。山本(1951)では、乙種本は Grube 氏の研究 (*Die Sprache und Schrift der jučen* (1896)) により、丙種本は阿波国文庫本によって、両本に共通する語彙項目325 (但し、「文史門」「数目門」所属語彙は考察対象から省かれている) を取り出し、簡単な語釈を附すとともに、「衣」、丙種“阿都”：乙種“哈都”などの比較から、丙種で a- に始まる語の一部が乙種では h- が冠せられている事 (山本(1951:75-76)) など、語音対応についても触れたところがある。Kane (1989) は丙種本 (底本にしているのは阿波国文庫本) の研究書で、各項目について、乙種本の中に対応の語がある場合は乙種

本の形をその都度記している。愛新覚羅烏拉熙春氏の一連の研究（特に、愛新覚羅（2001）、愛新覚羅（2002））は、丙種本の語彙項目について、ツングース諸語の形式を幅広く挙げながら再構作業を行っているが、乙種本の形が随所に参照されている。

以上の研究は、乙種本と丙種本の語形式の女真語としての異同を取り扱っているが、本研究では、専ら音訳漢字表記の立場から異同を検討し、両本の音訳漢字の性質を考察したい。

『女真館訳語』の雑字に収録された語のうち、乙種本と丙種本の双方に共有されているものは、筆者の統計によれば334語ある。以下、音訳漢字がうまく解釈できないものや誤字・顛倒の疑いなどがあって不審なもの7語⁶を除いた327語を幾つかの類型に分けて、分析してみよう。

3. 1. 乙種本と丙種本の音訳漢字が全く/ほとんど一致する語

3. 1. 1. 乙種本と丙種本の音訳漢字が全く一致するもの

この類型に属するものは50語ある。まず、そのうちの5項を挙げる：

見出し	音訳漢字(乙=丙)	満洲語文語 ⁷
雲	禿吉(乙6、丙2 ⁸)	tugi
虎	塔思哈(乙136、丙408)	tasha
扇	伏塞古(乙221、丙598)	fusheku
孫子	斡莫羅(乙285、丙673「孫」)	omolo
黒	撒哈良(乙620、丙1103)	sahaliyan

動詞の項目で、語尾は異なるが語幹部分の音訳漢字が全く同じものもいくつかある（この種のものも50項の中に含める）。ここでは、そのうちの2項を挙げる：

⁶ その7語を下に挙げる（音訳漢字の後ろの番号については注8参照）。

見出し	乙種	丙種	満洲語文語
知	撒希(353)	撒刺誇(844「不知道」)	sarkū
討	伯申(415)	捋失(786)	?baica-
借	拙木申(443)	拙兀(804)	juwen ?bu-
六	寧住(641)	寧谷(1115)	ninggun
七十	納丹住(660)	納答住(1125)	nadanju
大	安班刺(668)	昂八(1154)	amba
老	撒刺大(718)	撒答-捏麻(689「老人」)	sakda niyalma

⁷ 満洲語文語形の比定は筆者によるが、山本(1951)、道爾吉(1983)、Kane(1989)、及び愛新覚羅烏拉熙春氏の一連の著作など、先人の研究に負うたところが多い。

⁸ 語例中の番号は乙種本、丙種本それぞれの語彙項目の通し番号である。丙種本の場合、静嘉堂文庫本と阿波国文庫本とで一部門類の項目の順序が相当に違っている。本稿の丙種本の音訳漢字は阿波国文庫本に基づくが、検索の便のため、静嘉堂本を逐録した石田(1930)の項目番号をつけている。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
遅	貴答-刺(451)	貴答-哈(709)	goida-(動詞語幹)
説	恨都-魯(467)	恨都(774)	hendu-(動詞語幹)

乙種本と丙種本の音訳漢字が全く一致する項目のうち、例えば「虎」の例などは、原語として想定される音形が単純明快な上、『華夷訳語』全般を通じて極めて常用される音訳漢字ばかりが使われていることから、たとえ乙種本と丙種本が仮にそれぞれ独立に音訳を行ったのだとしても、全く同じ字面になることは十分に考えられる。しかし、全体を見渡して音訳漢字が全く一致する語が50にも達する以上、両者の音訳が独立に行われたと考えるよりは、両者の原語音形が一致していることを条件に一から他への参照が行われたと考える方が、蓋然性がより大きい。そして、『華夷訳語』一般において丙種本の成立が乙種本よりも後であると言われていること、言語特徴から見て丙種本女真館訳語が乙種本よりも清代の満洲語文語に近い特徴を示すこと、そして乙種本の音訳漢字が女真文字との関係において整然とした対応を見せていて音訳法に一貫性があることから考えて、女真館訳語において、丙種本が乙種本を参照したのであってその逆ではないことを推測し得るのである。

3. 1. 2. 乙種本と丙種本の音訳漢字がわずかな違いを見せるもの

この類型は61語ある。この種の事例においては、乙種本の音訳漢字 A が、丙種本において、漢字音として全く同音、あるいは声調のみが異なり声母と韻母は同じであるような別の音訳漢字 B に対応する。このため、両者が表記している女真語の音形は少なくとも分節音素に関しては全く同じであると考えられる。ここでも、まず5項を挙げる：

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
氷	朱黒(15)	珠黒(112)	juhe
象	素法(140)	速発(409)	sufan
身	背也(490)	背夜(888)	beye
食	者弗(535)	者伏(1018)	jefu
俊	和卓(717)	活着(676)	hojo

乙種本と丙種本の間に、音訳用字の組織的な差異が見られる場合がある。例えば女真語の e 音を表記するのに、乙種本では“厄”が常用されるのに対し、丙種本では“額”が常用されるなどである。このような音訳漢字の対には、他に次のようなものがある：

女真語音 ⁹	乙種本音訳漢字	丙種本音訳漢字
i	一	亦
bu	卜	不(多い)；布(少ない)
li, ri	里	力、里
fu	弗	伏
fa	法	発
ja	扎	筧
sin	申	深
de	忒 ¹⁰	得

これらもまた、3.1.1の事例と同様、丙種本の音訳者が一旦乙種本の音訳漢字を参照し、校訂の段階で音訳漢字を同音の別字に取り替えたものであろう。

本節で検討した語例は計111で、乙種本と丙種本の共通語彙のほぼ1/3にのぼる。このことから、乙種本と丙種本の女真語が極めて近いものであることが改めて確認される。同時に、丙種本の音訳者が、乙種本を参照しつつ、乙種本に附された音訳漢字が自らの知識の中にある女真語形と一致すれば基本的にそれを踏襲し、一致しなければ新たに音訳漢字をつける、というやり方で音訳を行ったことも推測できる。このことは、音訳漢字研究の立場から見れば、丙種本『女真館訳語』の音訳漢字が、資料的に均一のものではないということの意味する。

3. 2. 乙種本と丙種本の音訳漢字の示す音が分節音素のレベルで異なる語

この類型の語は72語ある。この差異を、乙種と丙種に基づいた女真語音の差異とみなすべきか、それとも音訳手法の差異と見做すかすべきかが問題となる。

3. 2. 1. 母音が異なる例

比較的目標立つのは、乙種本では o、丙種本では u が現れる例である。今煩を厭わず、全ての例を挙げる：

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
星	斡失哈(12)	兀失哈(7)	usiha
石	斡黒(52)	兀黒(133)	wehe
果	秃斡黒(124)	秃于黒(348)	tubihe
戦	瑣里-都蛮(455)	素力-必(814「斃殺」)	?sori-
菜	瑣吉(524)	素吉(354)	sogi

⁹ ここでは Kiyose (1977) の再構音に従う。

¹⁰ 乙種本の忒は te の表記にも用いられる。

黄	瑣江(618)	素羊(1101)	suwayan
是	一那(706)	亦奴(717)	inu

次の2例も乙 o : 丙 u の例と解したい。

哭	桑戈-魯(460)	宋谷-必(773)	songgo-
鼻	双吉(501)	宋吉(884)	songgin

上の2例において、満洲語文語の第一音節 song に対応する音訳漢字が、丙種本で“宋”であるのに対し、乙種本では“桑”、“双”となっている。この二字は、明代官話音から現代普通話に至るまで、それぞれ大差ない発音であったと考えられる。即ち、桑は [san]、双は [juan] のような音であったと考えられる（「双」の声母が [ʃ] であったか、[s] であったか、といった議論には立ち入らない）。乙種本のこの二つの音訳漢字が女真語のいかなる音声と対応するのかは、最終的には現代の満洲語諸方言や近縁のツングース諸語などの語形も視野に入れる必要があるが、その前の出発点として満洲語文語のみを材料に推測する場合、両方とも [son] のような音声だった可能性がある。元来、明代官話には、[sun] ないし [son] のような音節は存在した（丙種本に用いられた“宋”がまさにその例である）が、主母音の口の開きがやや大きい [son] のような音声は存在せず、例えばモンゴル語の songgina 「葱」や songgu- 「選ぶ」等の語の第一音節の song を、甲種本『華夷訳語』や『蒙古秘史』（『元朝秘史』とも称する）では“莎汪”（so-uang）と二字で表している。

甲種本華夷訳語：莎汪吉納（「葱」（109））

蒙古秘史：莎汪⁹忽周（「選揀着」）

音訳対象言語の [子音 + 母音 + 鼻音] 音節を二字に音訳するのは、甲種本『華夷訳語』や『蒙古秘史』ばかりでなく乙種本や丙種本の音訳漢字一般の在り方から見ても極めて異例であり、音訳者が、モンゴル語の song 音節を正確に音訳しようとして苦心したことが窺える。この表記の場合、“莎” so で原音の円唇性を表し、“汪” uang で原音の比較的大きな開口度を表したと解釈できる。また、元代の蒙漢語彙集『至元訳語』で、「葱」を“喪急刺”と音訳し、モンゴル語の song を sang 型の音節（“喪”）に音訳しているのも参考になる。これは、円唇性を犠牲にして開口度の大きさを優先した表記であると解釈できる。

乙種本『女真館訳語』の「哭」桑戈-魯の“桑”は、『至元訳語』の“喪急刺”と同様 sang 型の音訳漢字を選んだものであり、一方「鼻」双吉は、声母は合わないが、円唇性とやや大きい開口度の双方を同時に表記し得る uang 韻母をもって女真語の ong を表記したと解釈することができる¹¹。

¹¹ 声母が合う音節は [suɑŋ] であるが、この音節を形成するはずの心母と唐韻部合口の結合は、『韻鏡』

次の例は乙 au : 丙 u の関係になっている。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
槍	道里-味(457)	都力-勒(803)	duri-

満洲語文語の duri-mbi 「奪う」に相当する語であるが、乙種本の形は甲種本『華夷訳語』の来文に見える“倒兀里-周”（「槍着」、来文下22a2）と近く、この語がモンゴル語起源であることを暗示する。ここでは、乙 o : 丙 u の例に準じて理解したい。

逆に、乙種本が u、丙種本が o を示すと解釈できる例は次の五つである。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
一	卜楚(-禿吉)(14「霞」)	(不見哈-)博戮(1104「緑」)	boco(色の意)
布	卜素(559)	博素(976)	boso
木	没(117)	莫(353)	moo
唇	弗木(498)	(昂哈-)富莫(907「口唇」)	(angga) femen
短	弗和羅(691)	仏活羅(151)	foholon

これらは、最初の例の乙“楚”：丙“戮”以外は全て唇音声母に関わるもので、最初の例においても第一音節には唇音声母字の乙“卜”：丙“博”の対立が見られる。

乙種本の“卜”については、丙種本で“伯”に対応する例も二つあり、上5例との関連が見て取れる。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
土	卜和(38)	伯和(141)	boihon
米	卜勒(530)	伯勒(360)	bele

以上7例の唇音音節の満洲語文語における母音を見ると、中高母音の e、o になっており、乙種本の女真語において、唇音の後ろの中高母音が高母音化する傾向があったことをうかがわせる（ここで「傾向がある」と言うのは、乙種本には“薄”、“脈”、“莫”など、[唇音+e/o]を表記したと解釈し得る音訳漢字の例も複数あるからである）。

その他、乙種本と丙種本で母音表記が相違する例には、次のようなものがある：

I e ~ i

Ia 乙 i : 丙 e

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
月	必阿(4)	別阿(6)	biya
矢	你魯(237)	捏魯(580「箭」)	niru

第三十二転に見るように、中古音以来空き間である。現代普通話に suang 音節は存在せず、明代官話にも存在しなかったはずである。

Ib 乙 e : 丙 i

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
虫	兀滅哈(166)	亦迷哈(428)	imiyaha
死	ト車黒(389)	不尺黒(809)	bucehe

また、「有」を意味する述詞(満洲語文語:bi)は、乙種本では“別”(例:「有」別厄)、丙種本では“必”(例:「天有霧」阿瓜-塔兒麻吉-必)となり、乙 e : 丙 i の例にあたる。

I は、i と e の交替に規則性が見いだせず、母音の聴覚的差異も小さいので、音訳漢字表記の「揺れ」として処理すべきものであるかもしれない。

II 乙 i : 丙 a

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
児馬	阿只兒(-母林)(170)	阿筍刺(-木力)(447)	ajirgan
眼	牙師(496)	牙撒(882「目」)	yasa
鞦	忽的刺(228)	忽答刺(616)	kūdargan

II の例は母音の聴覚的差異が大きいので、表記法の相違と言うよりは、乙種本と丙種本の女真語の語形が実際に違っていたのであろう。

3. 2. 2. 子音が異なる例

19語の表記は子音の音色が一致しない。いくつかの類型があるが、比較的多いのは下の I に見る軟口蓋子音 g, k, h に関する違いである。

I g~k~h~∅にわたる差異

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
鶏	替和(161)	替課(422)	coko
鹿	ト古(146)	布兀(418)	buhū
書	必忒黒(216)	必忒額(1091「文書」)	bithe
胸	桶厄(502)	痛革(905)	tunggen
盤	阿里庫(242)	阿力古(582)	aliku
枕	替勒庫(550)	替兒古(592「枕頭」)	cirku
褲	哈刺庫(553)	哈刺古(968「褲子」)	haluku

I は乙 h : 丙 k : 満 k、乙 g : 丙 ∅ : 満 h、乙 h : 丙 ∅ : 満 h、乙 ∅ : 丙 g : 満 g、乙 k : 丙 g : 満 k など、対応がほとんど語ごとに異なっており、規則性が発見できない(最後の三項は名詞語尾“-庫”と“-古”の対応となっている)。かかる差異が乙種本と丙種本の女真語の所拠方言の違いであるのか、それとも音訳手法の違いであるのかは

決定しがたい。

一方、次の II, III, VI の三類型は、それぞれ二例ずつではあるが、乙種本と丙種本の女真語の所拠方言の違いを示すものかもしれない。但しと：s の二つの例は、満洲語文語との対応関係がやや不明瞭であるため、女真語の方言の違いではなく音訳の手法の違いの反映とも取れる。

II 乙mi : 丙ni

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
鴨	滅黒(160)	捏黒(424)	niyehe
跪	滅苦魯(466)	捏苦魯(761)	?niyakūrambi

III 乙h- : 丙Ø-

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
見	哈察別(352)	阿察(767)	aca-
服	哈都(551)	阿都(963)	adu

VI 乙t : 丙s

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
節	哈称因(80)	哈失(271)	hacin
甲	兀称因(233)	兀失(578)	uksin

3. 2. 3. 分節音素の有無の差異

ある子音や母音が片方には見え、片方には欠けているように見えるものは25語ある。これには更に次の類型がある。

3.2.3.1. 語中の鼻音の有無

I

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
霜	塞馬吉(9)	塞忙吉(8)	(未比定)
灰	伏勒吉(65)	伏冷吉(147)	fulenggi
鶯	嫩捏哈(159)	牛捏哈(423)	niongniyaha
血	塞吉(512)	生吉(921)	senggi
線	脱戈(250)	同谷(590)	tonggo

II

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
鏡	卜弄庫(251)	墨勒苦(581)	buleku
筴	撒本哈(257)	撒扒(583)	sabka

I類は満洲語文語側に語中の鼻音があるもの。「鶯」の例を除き、鼻音を欠くのは乙種本の方で、丙種本には鼻音がある。同じく「鶯」の例を除き、鼻音の直後の子音は軟口蓋閉鎖音 (lenis) の g である。

II類は満洲語文語側に語中の鼻音がないもの。二例とも、乙種本に鼻音があり丙種本には鼻音がない。同じく二例とも、鼻音の直後の子音は軟口蓋閉鎖音 (fortis) の k である。

I, II類を通じ、丙種本の音形が満洲語文語により近い。

3.2.3.2. 音節末及び母音間の r の有無

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
粗	麻兒(671)	麻(-灼兒窩)(183「粗沙」)	muwa
狐	朶里必(153)	多必(443「狐狸」)	dobi
河	必阿(40)	必刺(138)	bira
卓	忒厄(238)	得勒(568)	dere
面	忒厄(491)	得勒(892)	dere

「粗」の乙種本の -r は丙種本及び満洲語文語には見られない -r 終わりの語である。Kiyose (1977: 56) が指摘するように、語末に -r が立ったことは、満洲語文語と比較した場合の乙種本の女真語の特徴である。例：

見出し	音訳漢字(乙)	満洲語文語	Kiyose(1977)再構	愛新覚羅(2009) ¹² 再構
園	粉都兒(63)	(未比定)	fundur	fundur
龍	木杜兒(135)	muduri	mudu-r	mudur
朋友	捏苦魯(329)	(未比定) ¹³	neku-r	nekur

「狐」の乙種本の音訳漢字には丙種本にない「里」があり、乙種本の女真語の「狐」に相当する語に l が r が含まれていたことが推測される。この語について、清瀬氏は doribi、愛新覚羅氏は dorbi とそれぞれ再構しており、両氏ともに“里”を l ではなく r と解釈しているので、本項もひとまずこれに従うが、音訳漢字“里”自体は l に解することも不可能ではないから、この語を dolbi~dolibi と再構することもできる。

「河」以下の三例は、丙種本と満洲語文語の -r が、乙種本の音訳漢字では第二字のゼロ声母と対応する例である。この“r: ゼロ声母”の対応は、少ないが確かに存在し、次のようにゼロ声母による音訳が丙種本に及んでいるものもある：

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
泉	舍厄(48)	舍亦(144「泉(水)」)	šeri

¹² 愛新覚羅 (2009)、69-96頁、「『女真訳語』雑字の女真語彙」に見える。

¹³ cf. 蒙古文語 nökür「友」。

3.2.3.3. 音節末lの有無

I

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
霧	塔馬吉(18)	塔兒麻吉(17)	talman
夢	脱興(356)	托力希(852)	tolgi-
兔	古魯麻孩(150)	姑麻洪(421)	gūlmahūn
針	兀魯脈(249)	兀墨(594)	ulme
(匠)人	(法/失-) 捏兒麻(315)	(發失-) 捏麻(750)	faksi niyalma

II

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
夜	多羅斡(78)	多博力(274)	dobori

I類は満洲語文語においてIがあり、乙・丙のいずれか一方ではIの反映が見られないものである。前二者即ち「霧」「夢」では乙種本においてIの対音を欠くように見え、一方後三者即ち「兎」「針」「(匠)人」では逆に丙種本においてIの対音を欠くように見える。II類は、丙種本と満洲語文語にはIがないが乙種本にはIの反映と解釈し得る音訳漢字が存在する。「夜」の例は、“多”が満洲語文語の do、“斡”が満洲語文語の bo に相当すると解釈すれば、その間にある“羅”がIを表したと見ることが可能で、かつ鄂温克語や鄂倫春語の dołbo¹⁴「夜」を参照する時、この推定は蓋然性が高まる¹⁵。

なお、音訳漢字の字面から女真語原音のIの有無を議論するのには、慎重でなければならぬ。一般に、『華夷訳語』における鼻音以外の音節末子音Cの表記状況は複雑であり、音訳漢字の韻尾子音を借りる方式(-C型)、音訳漢字の声母を借りる方式(CV型)、訳さない方式(∅型)などがあり、音節末Iの場合は上述の三種の状況が全て存在する¹⁶。故に、音訳漢字上にIに対応する表記がないからと言って、原語にも-Iがなかったと即断することはできない。つまり、音訳漢字上のI表記の有無が、音訳手法の違いに帰せられる可能性があるということである。

3.2.3.4. 音節末mの有無

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
蘿蔔	捏住(132)	念木竹(375)	(未比定)
駝	忒厄(137)	忒木革(410)	temen (cf. 蒙古文語temegen)

¹⁴ 胡增益・朝克(1986:172)、胡增益(1986:192)。

¹⁵ 一方、満洲語文語形は、-lが脱落した dobo の形に -ri という音節がついている。この -ri は、erin「時」の縮約したものかもしれない。

¹⁶ 『華夷訳語』における音節末-I表記の詳細については、更科(2003)を参照。

この種の例はごく少ない。「蘿蔔」の項の女真語は女真文字では二字で書かれ、「捏」と対応するのは第一字 (Kiyose (1977) の番号14番) である。この女真文字は、乙種本では他に二語の表記に現れ、常に“捏”で音訳される。この文字は、それが現れる二語のいずれにおいても満洲語文語が比定できていないものの、語中での出現位置から見て、(niyam のような -m 終わりの音節ではなく) 開音節を表記した蓋然性が高く、Kiyose (1977 : 62)、愛新覚羅 (2009 : 52) 両者ともこの女真字に対して開音節音形 (それぞれ niya, nia) を再構しているのは妥当である。一方「駝」の項の女真文字も二字で記され、“忒”と対応するのは第一字 (Kiyose (1977) の番号332番) であるが、他の用例がないので、女真文字としては tem のような音を表したが、音訳時に -m がいわば零対音になった可能性を考えることもでき、実際 Kiyose (1977 : 77)、愛新覚羅 (2009 : 56) はこの女真文字にそれぞれ tem、təm という再構音形を与えている。

3.2.3.5. 母音の有無

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
(天)晴	哈勒哈(28)	哈刺哈(16「晴」)	galaka
塵	卜勒其(59)	不刺其(146)	buraki
龍	木杜兒(135)	木都力(407)	muduri
靴	古刺哈(546)	谷魯哈(969)	gūlha
勅	阿刺瓦吉(576)	阿兒哇(1087「聖旨」)	(未比定)

「(天)晴」、「塵」の例では、乙種本の“勒”を単子音 l/r の表記と見做し、丙種本の“刺”を la/ra の表記と見做すとき、乙種本側は l, r の後ろで母音を欠いていることになる。なぜ“勒”を単子音表記と見做しうるかと言えば、一般に“勒”字は確かに le, re をも表わすが、この両語は丙種本や満洲語文語形との比較から男性語であることが予想されるので、女性母音 e を含む le/re には再構され得ず、残る可能性は単子音 l, r のみとなるためである¹⁷。なお乙種本の「塵」の音訳漢字“卜勒其”自体は bureki あるいは buleki という再構も可能ではあるが、そのように再構した場合、この語が女真～満洲語の諸変種において男性語、女性語の二つの異形式を有したことに對する説明が必要となる。

「龍」の例では、乙種本の“兒”、丙種本の“力”、満洲語文語の -ri がそれぞれ対応

¹⁷ 金光平・金啓琮 (1980) で、女真文字の音価を乙種本女真館訳語の音訳漢字から再構する際の原則を述べる中で、“勒”、“忒”、“卜”などの音訳漢字を[子音+a]に再構するか、単子音に再構するかについて触れ、これらの字が男性語に出現した場合は単子音に再構するとしている (155頁) のは、この理由による処置である。但し、“卜”の場合は、この漢字が表記する bu 音自体は女性語にも表れうるから、この処置は正しいとは言えない。

している。“児”は『華夷訳語』全体の用字法から見ると単子音 r を意図した表記である可能性が極めて高い。単子音 l を表した可能性も皆無ではないが、満洲語文語を参照すればやはり r を表記したと見てよい。一方、丙種本の“力”は、単子音 l/r を表記した可能性が十分にあるが、満洲語文語を参照すれば、母音 i を伴った ri に再構するのが最もよい。そして、語の音韻構造の観点から見たとき、乙種本には子音 -r に終わる語があるのに対し、丙種本と満洲語文語には -r に終わる語がない、という違いがあることから、乙種本の“児”は r を、丙種本の“力”は ri を表記したと結論できる。ツングース歴史言語学の観点からは、乙種本の -r の段階がより古く、丙種本及び満洲語文語の -ri は母音 -i が添加された新しい形式であると見るべきであろう。つまり、乙種本の女真語から丙種本の女真語及び満洲語文語の基礎方言への発展において、開音節性が強まり、-r で終わっていた語の一部が i 添加を経て開音節語性を獲得したと考えられる。ここに出すのは少々唐突であるが、漢語との接触によって開音節性を強めたモンゴル語である東郷語にも同様の例が見られる。

語義 蒙古文語 東郷語¹⁸

牛 üker fukierui ~ fuqerui

「靴」の例については、議論の都合上丙種本の形から考察を始める。丙種本の“魯”は lu/ru を表記したと先ず考えるべきであるが、単子音（後ろに母音が続かない）l を表記したとも考えられる。一般に『華夷訳語』の単子音 l の表記においては、l を声母とし、さまざまな音色の母音をもつ漢字が用いられている。甲種本『華夷訳語』のモンゴル語表記例をいくつか挙げる¹⁹：

里：単子音 l

急里別里干(17「電」) gi/be/gen

多里吉顔(40「浪」) do/giyan

額出里格周(来文上22a「亡着」) ecü/-ge-jü

……

呂：単子音 l

雪呂孫(703「胆」) söl/sün

刺：単子音 l

巴刺哈孫(51「城」) ba/γasun

羅：単子音 l

亦帖羅骨(208「兔鶻」) ide/gü

¹⁸ 筆者が調査した甘肅省東郷族自治県董嶺郷出身者の東郷語。更科(2007)による。

¹⁹ これらの例の大部分は、更科(2003)の注釈7(16頁)にも挙げた。

魯：単子音 l

勺魯哈周(来文下20a「遇着」) joŋa-ju

額出魯古(来文上17a「廢的」) ecü/-kü

これらの例を見ると、lの表記に用いられた〔子音＋母音〕の音訳漢字において、音訳漢字の韻母は、その直前の音訳漢字と同じである(例:「電」、「城」、「廢的」)か、円唇性等の点で共通性がある(例:「胆」、「遇着」)ものが目立つ(“里”の例はまた別の傾向を帯びている)。更科(2003:16)において、服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』を引用しつつ論じたように、これらは、前後の母音の影響(口蓋化など)を受け、lが母音を伴っているように聞こえたものを写したものである可能性が大きい。また、“刺”“羅”“魯”については、前後の母音(例では、a, u, ü)の条件に加え、直後に k, g, q, γがある場合にこの種の音訳漢字が出現しやすいようである。丙種本の“谷魯哈”の“魯”は、直前の母音が u であり、直後には何らかの口蓋垂子音＋aを表記したと考えられる“哈”が使われているから、以上の条件にすべて当てはまっている。従って、単子音の l を表記したものであると見ることは十分な妥当性がある。

乙種本の“刺”は、一般には la/ra を表記したと考えるところであるが、上の議論を踏まえると、単子音 l を表記した蓋然性が出てくる。即ち、原語の l 子音が、“哈”に想定される原語の a 母音の音色に影響されて a 母音を伴っているように聞こえたものを写したと考える可能性が出てくるのである。

「勅」の例は目下満洲語文語形が未比定であり、考察が困難であるが、乙種本と丙種本の語形を比較する時、乙種本の側に“吉”に該当する語尾があったらしいこと、及び乙種本の“刺”が丙種本では“兒”であることを知りうる。乙種本の“刺”の解釈について言えば、先程丙種本の「靴」の例について考察した場合と同様、これが単子音 l を表記した可能性も十分ある。

3. 3. 乙種本と丙種本の語形が形態論レベルで異なる語

この種の例は84語ある。これらは、音訳手法の違いではなく、乙・丙両本が基づいている女真語の言語差異の反映と見做しうる。

3. 3. 1. 名詞の語末の -n の有無に関するもの

この類型は56語(本稿の中で他の類型として数えたものを除けば、53語)を数える。基本的に乙種本には -n があり丙種本には -n がない。この種の語に対応する満洲語文語形の大部分には -n があり、少数は -n がない。全てを挙げる煩を厭い、ここでは5例だけを挙げる。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
風	厄都温(5)	額都(9)	edun
煙	上江(13)	尚加(29)	šanggiyan
馬	母林(138)	木力(411)	morin
驢	厄恨(141)	額黒(437)	eihen
猴	莫嫩(152)	莫虐(425)	monio

丙種本に -n があり乙種本には -n が見えない例は次の三つのみである。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
林	扎卜(47)	不章(233「山林」)	bujan
鴛鴦	古牙忽(180)	谷牙洪(518)	(未比定)
櫓	木刺(239)	木郎(569)	mulan

このうち「林」の例は、乙種本の音訳漢字に顛倒が疑われ、また「櫓」の例は、女真文字においては語尾に -an を示す字があることから乙種本の音訳漢字に誤脱があると見られる。

3. 3. 2. -n 以外の語尾の有無や異同に関するもの

この類型に属するものは31語を数える。多くの下位類型に分けられるが、ここでは代表的なものをいくつか挙げるにとどめる。これらは、音訳漢字に誤脱がない限り、乙種本と丙種本の女真語語形が異なっている例であると言える。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
水	没(51)	木克(132)	muke
枝	哈兒(123)	哈兒哈(364)	gargan
船	的孩(254)	的哈(618)	jaha
舌	一稜古(499)	亦冷吉(886)	ilenggu
新	一車吉(626)	亦車(193)	ice

3. 4. 音訳された形式の長さの差異

乙種本と丙種本の音訳漢字を比べて、字数が異なる語は少なくない。その中に、乙・丙いずれか一方で二字に表記される部分が他で一字に融合し、結果として音節数一つ減っているように見えるものがある。この種の例は圧倒的に、長い形式は乙種本の方で、短い形式は丙種本の方である。この類型に属するものは35語あり、更にいくつかの下位類型に分けられるが、大部分は、音訳漢字の乙・丙いずれか一方の側において、連続した二字のうちの後ろの字の牙喉音声母が、他の側において脱落し、結

果として二音節が一音節に縮約したように見えるものである。中でも、乙種本において、二字目が零声母である連続した2つの音訳漢字が、丙種本の対応する部分において一字に融合するパターンが多く、二字目の声母が /k/ (無声無気音)、/h/ (無声摩擦音) である場合がそれに続く。ここでは例の一部を挙げる。なお、例示中、下線を引いた音訳漢字について、二字にわたっている側に対し、一字になっている側に融合が起こっている。また、本節においてのみ、乙種本の音訳漢字の間に “/” の記号を入れて、音訳漢字と対応している女真文字の境を示す。例えば「遠」の例の“戈/羅/幹”では、“戈”に対して女真文字第一字が、“羅”に対して女真文字第二字が、“幹”に対して女真文字第三字がそれぞれ対応する。一方「九」の例の“兀也温”の場合、“/”がないので、この3つの漢字全体が一つの女真文字に対する音訳になっていることが示される。

I

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
遠	戈/羅/幹(701)	過羅(156)	goro
孩兒	追一(294)	追(719「子」)	jui
九	兀也温(644)	兀容(1118)	uyun
年	塞/革(82)	塞(270)	se
打	都/古(/味) ²⁰ (464)	度(808)	du-

II

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
路	住/兀(57)	住(134)	jugūn
花	一/勒哈(118)	亦刺(347)	ilha

I、IIはいずれも乙種本の方が長い形になっている。満洲語文語形は、Iでは丙種本の短い形に近く、IIでは乙種本の長い形に近い。

III

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
金錢豹	牙刺(148)	牙兒哈(504)	yarha
打囤	撒/答(/味)(481)	撒哈答必(820)	sahadambi

IIIは上の2例が全てで、I、IIとは逆に、丙種本の方が長い形であって乙種本は短い形になっている。満洲語文語形は丙種本の長い形に近い。

IV

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語

²⁰ - 味は動詞語尾である。

肚	<u>黒夫里</u> (508)	<u>後力</u> (894「腹」)	hefeli
鞋	<u>撒/卜</u> (555)	<u>掃</u> (971)	sabu

IVは乙種本の下線部二字目の声母が唇音/f/, /p/で、丙種本では-u韻母字に縮約している。満洲語文語形は乙種本の長い形に近い。

V

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
惰	<u>巴/奴</u> 洪(406)	<u>伴忽</u> (810「懶墮」)	banuhūn
髮	<u>分/一里/黒</u> (493)	<u>分黒</u> (891)	funiyehe

Vはやや特殊で、乙種本の丙種本の短い形が-n韻尾字に縮約している。満洲語文語形は、「惰」の例では乙種本に近く、「髮」の例では乙種本と丙種本の間隔的な形である²¹。

VI

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
天	<u>阿卜哈</u> (/以)(1)	<u>阿瓜</u> (1)	abka
脚	<u>卜的/黒</u> (505)	<u>伯帖</u> (890)	bethe
塩	<u>答卜/孫</u> (527)	<u>答粗</u> (1011)	dabsun
紅	<u>弗刺/江</u> (617)	<u>伏良</u> (1105)	fulgiyan

VIも乙種本が長い形、丙種本が短い形を示し、満洲語文語形は「脚」の例を除き乙種本の形に近い。縮約に際して、I～Vの各例と比べやや複雑な改変が起こっている。

I～VIの各例を通観する時、丙種本の音訳漢字が示す形は概して短く、あるものは清代の満洲語文語形よりも短くなっている。丙種本のこれらの短い形の解釈については、更科(2013)において、上掲の「肚」「惰」「髮」や他の多くの例を詳細に検討したことがある。更科(2013)では、丙種本の形が縮約によって満洲語文語形より短くなっているように見えるものについては、縮約は丙種本の女真語に存在した強勢の反映であると考えた。即ち、縮約が起こっている部分を、丙種本が記録している女真語の弱化音節であると考えた。この仮説の前提として、当時及び現在の筆者には、丙種本『女真館訳語』の音訳漢字は、女真語の音韻(子音や母音)を忠実に表記したものというよりは、女真語の語(word)が発音された時の聴覚印象により多く影響され

²¹ 乙種本の「髮」に対する愛新覚羅(2009: 78)の再構形は funirhəi である。これに従う時、-r- が脱落してその代償にəが挿入されたのが満洲語文語形の形であり、-ir- 全体が脱落(または、満洲語文語形と同じ -iə- の段階から説明してもよい)したのが丙種本の形であると説明できる。ただ、丙種本の“分黒”が丙種本の女真語の音韻形式を正確に反映したものであるとは限らない。すぐあとの議論を参照。

た音写であるという認識がある。聴覚印象に従うため、アクセントなどによる子音や母音の弱化が縮約という形で音訳漢字の上に現れたと考えるのである。つまり、丙種本の音訳は聴覚的である。実際、丙種本には、満洲語文語形と比べた場合に、音訳漢字の声母と韻母を単音連続に還元すると似ても似つかないが、語全体の音形は何となく把握されているように見えるがゆえに、耳で聞いた形を記録したとしか思えないものがいくつかある。例えば（丙種本の音訳漢字と満洲語文語の対応する部分に下線を引く）²²：

見出し	音訳漢字(丙)	満洲語文語
柝(房)	額峰必(541)	<u>efule-<i>mbi</i></u>
稲	洪帕(361)	<u>holimpa</u>

一方、乙種本『女真館訳語』の音訳は、2. 2に述べたように、女真文字一字一字に対する音写であるから、一語を複数の女真文字で表す場合（例えば、上記Iの「遠」「年」「打」など）は、各女真文字に対する音訳のつなぎ合わせになり、子音や母音の弱化現象やアクセント等を反映し得ない。それらの現象は「語」を単位として起こるものだからである。その意味で、乙種本『女真館訳語』の音訳は、転写的にならざるを得ない。乙種本『女真館訳語』の音訳された語形が長くなるのは、乙種本が表記している女真語が実際にそのように発音された可能性ももちろんあるが、女真文字を忠実に転写しているからであるという側面も考慮されなければならない。

丙種本の音訳漢字が示す音形が同じ言語種の乙種本よりも短くなる現象は、モンゴル語を記述した『韃靼館訳語』にも見られる。『韃靼館訳語』の乙種本の音訳漢字は、ほぼ全て先行する甲種本に基づいているので、ここでは甲種本と丙種本の比較を提示する²³。

見出し	甲種本	丙種本	蒙古文語	(参考) 現代モンゴル語音 ²⁴
剪子	孩亦赤	海尺	qayici	[xæ:ʃ]
後	𠵼豁亦納	槐納	qoyin-a	[xœ:n]
寒	闊亦田	奎団	köyiten	[xuitən]

²² 下に挙げた2例の詳細な解釈については、更科（2013：148-149）を参照。

²³ 下に示す甲種本と丙種本の音訳漢字の対照は、蒙古文語の *ayi*, *ayu* などのタイプの音連続の表記法の問題として、更科（2002）においても掲げた。

²⁴ 現代モンゴル語音欄の IPA は内蒙古大学蒙古学研究院（1999）による。その「凡例」によれば、この IPA 表記は、中国の蒙古族のモンゴル語の標準音（正藍旗を代表とするチャハル（察哈爾）土語）の“口語読法”に基づいている。按ずるに、この標音は、《蒙古語簡志》をはじめ、中国国内で刊行される蒙古語文著述において広く見られるチャハル方言語音の簡略表記と同じものであり、ここに引用するだけの代表性があると思われる。但し、原文で [ə] に符号 [ʷ] (短弱性を表す) がついたものは、引用に当たり、印刷の都合上、[ə] を斜体にして表記する。

山	阿兀刺	襖刺	ayula	[o:l]
雲	額兀連	偶列	egüle(n)	[u:l]

いずれも、モンゴル語で ayi, oyi, öyi, ayu, egü などとつづられる連母音を含む例であり、甲種本では問題の音連続を漢字二字で表しているが、丙種本では二重母音（韻尾 -i, -u を持つ韻母）字一字で表しているため、字数がそれぞれ一字少なくなっている。この差異は音訳手法の違いであると見られるが、甲種本の音訳が蒙古文語形の比較的忠実な転写に近く、一方丙種本の音訳は、現代モンゴル語の口語音よりは古い形を示すものの、音節縮約が見られる点で、より口語的であると言い得る。一般に丙種本が口語的であると言われていることを踏まえると、丙種本『韃靼館訳語』がモンゴル語の連母音を二重母音的に表記したこともまた口語音に傾斜した特徴の現れであり、偶然ではないと考えられる。

3. 5. その他の音訳手法の違いによる差異

3. 5. 1. 音節副音的 i の表記に関する差異

「亀」の例では、aihūma の音節副音的 i が、乙種本では音訳漢字第二字の介音に反映されているのに対して、丙種本では音訳漢字第一字の韻尾に反映されている；「四」の例では、duin の -i- について、乙種本では「亀」の場合と同様音訳漢字第二字の介音（あるいは主母音）として反映されているのに対して、丙種本では、音訳漢字第一字の韻尾と第二字の介音の両方にまたがる形で反映されている。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
亀	阿于馬(164)	艾兀麻(467)	aihūma
四	都因(639)	对因(1113)	duin

こうした差異は、乙種本と丙種本が描写している女真語の音韻的差異ではなく、音訳手法上の差異であると解釈することが十分に可能である。

3. 5. 2. 乙種本の韻母重複表記

まず、例を挙げる。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
皇帝	罕/安(/你)(272)	哈安(653)	han
兄	阿渾/温(286)	阿洪(662)	ahūn

乙種本の下線部分の二字の韻母は同一である。重複して出現する韻母は、当該の女真語の語の語尾を表記した女真文字の音価と同じである。即ち、「皇帝」の例では、“安”と音訳される女真文字第二字（Kiyose (1977) の382番）によって表記される語

尾 -an が直前の字から繰り返され（罕、安）、また「兄」の例では、“温”と音訳される女真文字第三字（Kiyose（1977）の66番）によって表記される語尾 -un が直前の字から繰り返される（渾、温）。「皇帝」の女真文字第一字（Kiyose（1977）612番）と「兄」の女真文字第一字（Kiyose（1977）482番）はいずれも表意字で、うち「兄」には、語尾字（66番）を伴わずに用いられた例も見つかる（金（1984：31））。少なくとも482番の女真文字は、もともと語尾字を伴わなくとも、単独で「兄」という語の表記に用いられ得たことになる。乙種本の音訳者は、「皇帝」「兄」を音訳する時、最初の表意字を見て、語尾を含めたその語全体の音訳を附した上に、語尾字も音訳してしまったために、結果的には語尾に対する音訳が蛇足となったと考えられる。乙種本の女真語において、han-an とか ahun-un のような語形が存在したとは考えられない。

3. 5. 3. 音節末鼻音の表記

満洲語文語の -n に対して、乙種本の音訳漢字では -n 韻尾字が、丙種本の音訳漢字では -ng 韻尾字が、それぞれ対応する例がある。全般に丙種本女真館訳語では -ng 韻尾字を多く用いる傾向にあるが、一方で -n 韻尾字も大量に用いられ、両韻尾字の使い分けについて、なかなか条件を見出しがたい。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
三	以藍(638)	亦郎(1112)	ilan
八	扎困(643)	箭空(1117)	jakūn

乙種本の -n と丙種本の -ng について、基づいた女真語の音韻の差異によるのか、それとも音訳手法の差異によるのかを判断することはなかなか難しい。一般に『華夷訳語』において、音訳漢字の -n 韻尾と -ng 韻尾の別はおおむね、音訳対象言語の -n と -ng の別と厳格に対応しており、例外はごく少ない。従って、丙種本『女真館訳語』の音訳漢字に現れる -ng 韻尾が、丙種本が基づいている女真語の音韻をそのまま反映していると考えたくなる。しかし、女真語の「三」や「八」に -n[n] ではなく -ng[n] を想定することは、ツングース語史の観点からは難しいように思う。

筆者の把握する限り、音訳対象言語の -n が -ng 韻尾字で音訳される現象は、他に、丙種本『回回館訳語』においてみられる。即ち、丙種本『回回館訳語』においては、ペルシャ語の長母音 ā, ū と n の結合 (ān, ūn) が、-ng 韻尾字で音訳される。ところが、乙種本『回回館訳語』においては、当該の結合は [開韻母字] + “恩” の二字で表され、-n の部分は期待通り -n 韻尾字 “恩” をもって音訳されているのである。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	ペルシャ語
雨	把刺恩(7)	把郎(4)	bārān
牙	胆搭恩(309)	胆当(463「齒」)	dandān
柱	速秃恩(362)	速通(264)	sutūn

その一方、in については、丙種本においても、-ng 韻尾字ではなく、-n 韻尾字が用いられる。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	ペルシャ語
地	則米尹(46)	則民(28)	zamīn
甜	史里尹(561)	湿林(528)	šīrīn

思うに、『回回館訳語』におけるペルシャ語の[長母音 + n]の音訳法の状況は、『女真館訳語』と類似している。『女真館訳語』においても、乙種本 -n 韻尾字：丙種本 -ng 韻尾字の関係が見られるほか、丙種本で -ng に音訳されている -n の直前にある母音についても、a, u のような奥舌母音であるという共通点がある。即ち、丙種本『女真館訳語』において、満洲語文語の -n に対応している -ng 韻尾字を調べると、上掲の“郎”“空”の他は“当”“湯”“昂”“羊”“董”“洪”“翁”“容”など主母音が a や u であるものが多く、“興”(例：「放(火)」興答必(1059)、満洲語文語 sindambi) など i であるものは稀である。

丙種本の回回、女真の両『訳語』において、奥舌母音 + n の表記に揃って -ng 韻尾字が用いられたのは、それぞれの音訳対象言語の当該の鼻音が実際に軟口蓋音に発音されていた可能性ももちろん捨てきれないが、乙種本と丙種本の性質の違いに関して本稿で検討してきたことを念頭に置くとき、丙種本の音訳が聴覚的手法でなされたことの反映である、と考えたい。ペルシャ語の長い奥舌母音 ā, ū や女真語の奥舌母音 a, u の奥まった聴覚印象が、丙種本の音訳者をして、たとえ鼻音の調音点が不正確に音訳されることを犠牲にしても、同様に主母音がより奥まって響く漢語 -ng 韻尾字を選択せしめた、と仮定するのである。それに対し、乙種本の音訳者は、音訳に際し民族文字を転写する態度を保持するため、母音の聴覚印象にはとらわれずに、音訳対象言語の -n の転写に漢語の -n 韻尾字を選択したのである(この推測は、単音文字であるペルシャ文字が参照できた『回回館訳語』について特にあてはまる。女真文字は単音文字でないので、この推測にはあまり説得力がないが、事実として丙種本において -ng 韻尾字がより多く用いられていることは指摘できる)。

3. 6. 乙種本と丙種本の語形が、同源ではあるがかなり違っているもの

ここに挙げるものは、乙種本と丙種本が確かに同一語根から出た語であるように思

えるけれども、差異を音訳手法の違いとして説明するのは困難であり、乙種本と丙種本が描写対象とした女真語形そのものが違ってたと解するべきものである。今後の形態素分析の進展如何により、これらのうちの一部は、3.3.2の類型に含まれる可能性がある。ここにその全てを録す。

見出し	音訳漢字(乙)	音訳漢字(丙)	満洲語文語
雨	阿哈(8)	阿古(3)	aga
露	失勒温(10)	失雷(12)	silenggi
井	希石(56)	忽提(135)	hūcin
墻	法答岸(64)	発的刺(136)	fajiran
沙	失里黒(67)	灼児窩(145)	(未比定)
杏	婦法刺(110)	貴(352)	(guilehe)
獅子	阿非(139)	阿非阿(433)	(未比定)
父	阿民(282)	阿麻(661)	ama
問	番住埋(444)	仏你(775)	fonji-
飯	卜都乖(523)	不答(1010)	buda
醬	一速温(528)	迷速(1009)	misun
襪	弗赤(556)	伏莫尺(970「襪子」)	(乙)foji? ; (丙)fomoci
珠	寧住黒(572)	泥出(1068「珍珠」)	nicuhe
薄	南克洪(693)	捏克葉(153)	nekeliyen

4. まとめ

以上、『女真館訳語』の乙種本と丙種本の音訳漢字の異同について詳細に検討した。検討の結果、次の二点が明らかになった。

一、乙種本『女真館訳語』の音訳は、乙種本自身に記載された女真文字を単位にしてなされた。従って、先行する他の語彙集に見える音訳漢字を踏襲したものであるとは考えにくい。一方、丙種本『女真館訳語』の音訳漢字は、乙種本と全く一致あるいは基本的に一致するものが共通語彙の約1/3を占め、乙種本を参照できる部分は参照したことを示す。

二、乙・丙両『女真館訳語』の音訳漢字の不一致には、両本が基づいている女真語の音韻の差異を示すもの、形態の差異を示すもののほか、音訳手法が転写的であるか、聴覚的であるかの差異を示すと考えられるものが含まれている。後者に属する可能性があるのは、丙種本に見られる音声の縮約(3.4)や音節末鼻音の表記(3.5.3)などの差異である。また、3.2に論じた分節音の差異については、おお

むね両本が基づいている女真語の音韻の差異であると解釈できるが、e~iの揺れや-lの有無など、音訳の際に差異が発生した可能性が残るものもある。

乙種本と丙種本の音訳漢字の差異の中に、それらの表記対象たる言語そのものの時代・方言・文体上の差異の他、音訳手法の差異の反映がある可能性は、今回扱った『女真館訳語』のみならず、先行研究において言語差異があまり議論されない『韃靼館訳語』や『回回館訳語』にもあり、また既に乙/丙本間の言語差異が指摘されている『西番館訳語』、『百夷館訳語』、『高昌館（畏兀兒館）訳語』などにもある。音訳漢字に対する更に精密な再検討が必要である。

参考文献

愛新覚羅 烏拉熙春（1996）「会同館『女真訳語』音韻の研究」。『大阪産業大学論集 人文科学編』90、1996年9月、13-27頁。

愛新覚羅 烏拉熙春（2009）『明代の女真人：「女真訳語」から「永寧寺記碑」へ』。京都大学学術出版会。

石田 幹之助（1930）「女真語研究の新資料」。もと『桑原博士還暦記念東洋史論叢』所収、今、石田幹之助（1973）『東亜文化史叢考』、財団法人東洋文庫、1973年3月、3-69頁所収による。

斎藤 純男（2003）『中期モンゴル語の文字と音声』。中西印刷株式会社出版部 松香堂、2003年2月。

更科 慎一（2002）「漢字音訳によってモンゴル語を記した明代のいくつかの資料について—研究序説—」。財団法人霞山会『中国研究論叢』3、53-68頁、2003年6月。

更科 慎一（2003）「所謂甲種本華夷訳語の漢字音訳手法の一端」。東京都立大学人文学部『人文学報』341号、2003年、1-18頁。

更科 慎一（2007）「中国甘肅省東郷県董嶺郷の東郷語」。『山口大学文学会志』第57巻、25-53頁。

更科 慎一（2013）「丙種本女真訳語の音訳漢字に反映された女真語の音声的特徴について—超文節的特徴を中心に—」。『太田斎 古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』好文出版、2013年、141-152頁。

庄垣内 正弘（1982）『『畏兀兒館訳語』チュルク語の性格について』。『神戸外大論叢』33/5、21-37頁。

西田 龍雄（1961）「十六世紀におけるパイ・イ語：漢語、漢語：パイ・イ語単語集の研究」。『東洋学報』43/3、1-48頁。

西田 龍雄（1963）「十六世紀における西康省チベット語天全方言について—漢語・

チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館訳語』の研究—。『京都大学文学部研究紀要』7、85-174頁。

西田 龍雄（1970）『西番館訳語の研究—チベット言語学序説—』。松香堂（華夷訳語研究叢書Ⅰ）。

山本 守（1951）「女真訳語の研究」。『神戸外大論叢』2/1、1951年4月、64-79頁。

爰新觉罗 乌拉熙春（2001）「明代女真语的辅音系统」。『立命館言語文化研究』13/1、2001年5月、193-259頁。

爰新觉罗 乌拉熙春（2002）「明代女真语的元音系统」。『立命館言語文化研究』14/1、2002年5月、245-275頁。

道尔吉（1983）《女真语音初探》。载道尔吉、和希格《女真译语研究》（《内蒙古大学学报 哲学社会科学版》1983年增刊），1-239頁。

胡 增益（1986）《鄂伦春语简志》。民族出版社。

胡 增益、朝克（1986）《鄂温克语简志》。民族出版社。

金 光平、金 啓琮（1980）《女真语言文字研究》。文物出版社。

金 啓琮（1984）《女真文辞典》。文物出版社。

内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所（1999）《蒙汉词典（增订本）》。内蒙古大学出版社。

Kane, Daniel 1989, *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Bloomington: Indiana University.

Kiyose, Gisaburo N. 1977, *A Study of Jurchen Language and script*. Hōritsubunka-sha.